

大成功だった、「中国アコーディオン協会」との交流

張自強氏(中国アコーディオン協会会長)が JAA名誉会員に!

第10回北京国際アコーディオンコンクールの審査要請をうけ、松永勇次、川口裕志(審査員)、虞錫安(事務局/通訳)、柴崎和圭、森陽介(事務局/視察、演奏)の日本代表団一行5名は、8月10日~17日までの8日間(上海訪問を含む)の中国訪問を終えて帰国した。

短期間ではあったが、〈中国アコーディオン協会との交流〉〈中国の子供たちの日本招請/少年宮を中心〉〈JAAの活動紹介と第4回JAA国際アコーディオンコンクールの案内/中国語の概要書作成〉〈中国のアコーディオン事情視察〉と、4つの大きな目的を達成できた。

中国アコーディオン協会会長・張自強氏は、「この交流を第一歩とし、末長く交流していきたい」と歓迎の意を表明、日本アコーディオン協会・名誉会員への就任を快諾してくれた。

若い熱気に満ちた「北京国際アコーディオンコンクール」

昨年、「サズ」で延期された「北京国際アコーディオンコンクール」は今回で10回目を迎え、予選:2日間、決勝:2日間の計4日間(8月10日~14日)にわたり開催された。出場者数は延べ600名。音楽大学のアコーディオン科学生や国内の若い奏者、子供たち、ロシアをはじめ外国からの参加者が集い、若々しく熱気にあふれていた。

当初、審査の条件や方法等についての問題を提起し、主催者側との折衝に時間を費やし、「予選審査」には参加できなかったが、「中国アコーディオン協会」の誠意ある対応によって「決勝審査」には参加できた。審査員及び「中国アコーディオン協会」の幹部の皆さんの歓



▲日中友好を約束しあう、張会長(左)と松永会長

北京★

上海★

中国はアコーディオン大国!

「第10回北京国際アコーディオンコンクール」を審査して
松永勇次

◆開幕のファンファーレ

10日19:30、第10回北京国際アコーディオンコンクールの開幕式。会場の世紀大ホールは子どもたちや若い参加者であふれていた。私たちの到着を待っていたかの様に開演ベルが鳴り、アコーディオン合奏が始まる。音楽学校の教授や北京アコーディオン協会理事らの合同演奏で、指揮は上海音楽院の教授。開幕ファンファーレに相応しくダイナミックで華やかな演奏だった。

コンクール組織委員会本部のある「姜傑(ジャン・ジェ)文化芸術センター」は1985年創立。中国文部省の“全国の少年の文化の仕事の模範チーム”という称号を得て、現在は600人以上の国内外の教師陣と一万人以上の生徒を持つ。音楽、ダンス、美術、英語、コンピュータの5項の専門科目があり、北京中央音楽院と連携し、ピアノ、アコーディオン、バイオリンのグレード試験センターを備えている。オーナーである姜傑氏は、このコンクールの総合プロデューサー的存在の実力者のよう



▲開幕式・オープニングの合奏

で、司会や運営、演奏、編曲など、随所にその顔を見えていた(プログラムでは組織委員会主席と紹介)。今回のコンクール審査では、日本代表団受け入れの窓口になっていた方である。

コンクールの企画・運営は、私企業である「姜傑文化芸術センター」、いわゆる大きな楽器店が北京手風琴学会など中国アコーディオン協会の主要都市の協会とともにコンクール組織委員会を構成して進めていた。

迎をうけ親しく面談、友好が深まった。多くのスタッフの方々が暖かく対応してくれた。

コンクールをはじめ、様々な場所でアコーディオンの演奏に接して、「音楽的、技術的なレベルは高く、世界的なレベルに近い状況である」「音楽大学等にアコーディオン科がある事により、優れた若い奏者や指導者が育っている」「その規模と広がり、組織化において、世界的に見て最も進んでいるのではないか」…など、代表団では感想が話された。

この成果を活かすは

「アコーディオン・サマーフェスタ2005」!

今回の中国訪問は資金面で幾多の困難があったが、この日中交流の第一歩は、JAAにとって大きな意義ある取り組みであった。この成果をまず「アコーディオン・サマーフェスタ2005」につなげていくことが大切であると確認し合った。

柴崎、森両氏の参加について、募金を頂いた関係各位に心から感謝する。これによって、今回の取り組みが資金的にも精神的にも大きく支えられた。ありがとうございました。



▲ホテルから眺めた北京の街並み

開幕式(コンサート)プログラム/世紀大ホール

1. 合奏;ウイグル民歌編曲他3曲 ①
(北京アコーディオン学会理事/北京国立鍵盤学校・姜傑文化芸術センターの先生)
2. 双二重奏;ロシア民謡メドレー(四川音楽院)
3. 四重奏;アムール河の波(北京本城区少年宮)
4. 二重奏;トッカータ LEON BOELLMANN(西安音楽院)
5. 合奏;アコーディオンポルカ(北京崇文区少年宮)
6. アコーディオンと民族楽器;洞窟三像(中国曲学院)
7. 合奏;前奏曲/リベル・タンゴ(太原山西選金山芸校)
8. 二重奏;TICO TICO(姜傑文化芸術センター)
9. 二重奏;洗衣服(北京宣武区少年宮) ②
10. 二重奏;タランティラ(中国音楽学院)
11. 二重奏;ロシア民謡(上海音楽学院)
12. 四重奏;タランティラ(リスト)(解放軍芸術学院) ③
13. 双二重奏;二つのギター(天津音楽学院鍵盤系) ④
14. 四重奏;ウエストサイド・ストーリー(バーンスタイン)(首都師範大学音楽学院)
15. 室内楽;弦楽Sセレナーデ長調(モーツァルト)(姜傑文化芸術センター) ⑤
16. 合奏;アルルの女第二組曲(ビゼー)他3曲
(北京市少年宮アコーディオン楽団/北京威亮アコーディオン楽団)



▲開幕式プログラム

▲子供たちの演奏、女性だけの演奏、若い演奏者たちの意欲的な演奏が続き、ポップス傾向の曲に対する聴衆の反応が面白かった。後でわかったことだが、後日のコンクールで重奏、室内楽部門へ出場する人たちがここで活躍していた。

8/10

13:00、北京空港到着

19:30、第10回北京国際アコーディオンコンクール開幕式に参加。

深夜、開幕パーティーの招待を受け参加。

コンクール組織委員会本部のある姜傑(ジャン・ジェ)文化芸術センターでのパーティーに招待され、出演者や幹部の皆さんと交流。この日初めての食事をとることができた。

この夜、北京中央音学院の海外留学生宿舎に宿泊。

開幕式の会場ロビーに展示された
中国の新機種アコーディオン: PEARL RIVER

アコーディオンを抱えて踊る奏者▶
(開幕式プログラム2参照)



▲ロシアの演奏家たちと名刺交換
(開幕式の会場控え室で)



◆現場のスタッフの大変さ

開幕式から宿舎にもどった深夜、私たちはさすがに疲れきっていた。その上、コンクール運営の状況が把握できず困惑状態であった。とにかく、審査にあたっ必要の情報提供がないのだ。唯一、中国語のわかる虞錫安さんがコンクール事務局との折衝を続けた。やりとりには非常に時間がかかり、結果として11日～12日の予選審査は参加するに至らなかったのだが…。どうやら外国からの審査員は私たち2人とロシア組5～6名のようなのだが、事務局がスタッフ不足で混乱状態にあるらしいということも徐々に解ってきた。

しかし、11日夜、中国アコーディオン協会会長の張自強氏に接見して以後、事態は急速に変わっていった。氏の敏速かつ原則的で誠意あふれる対応によって、日中両アコーディオン協会の交流の取り組みが効果的に進んでいった。決勝審査にも参加の道筋が開かれた。コンクールの忙しい日程の最中、多くの協会幹部、スタッフの皆さんが親しく接し、友好的に多くの時間をさいて下さったことに深く感謝したい。

◆にこやかに握手を求められる

13日8:30、いよいよ決勝審査1日目。コンクール会場である北京中央音楽院に入る。音楽院の教室は、本選出場者たちの指ならしのすさまじい音であふれていた。若

い女性担当スタッフは、私たちをみてホッとしたようで、嬉しそうな笑顔をみせて控室に案内してくれた。他の審査員たちがにこやかに握手を求め、話かけてきた。



▼コンクール事務局で忙しく立ち回るスタッフ
(左端の人が日本代表団担当の馬さん)

簡単な打ち合わせの後、コンクール会場に入る。2会場での同時審査なので、日本審査員も2手に分かれた。説明では、私が審査を担当するのは【児童A組(10～12歳)／少年A組(16～17歳)の部】のはず。審査が始まり、最初の出場者はポリフォニックの課題曲とフリーベースを弾き、なかなかの演奏。どうみても児童といった風情ではない。ここで初めて、先ほど聞かされた担当の審査部門は川口さんと逆であることに気がついた、といった次第。まずは言葉の壁とでも言おうか…。これ以後も“どうしてそんなこと、事前にわかっていないの?”と思われるようなことが起こる。私の通訳をお願いした虞錫安さんは大

8/11

8:30、コンクール1日目:予選／会場は4日間とも中央音楽学院

朝、宿舎から市内のホテルに移動。

昼、主催者側との審査に関する折衝困難により審査を欠席。

夜、張自強会長宅に招待される。

中国アコーディオン協会との今後の交流に関する会談をもつ。▶

8/12

8:30、コンクール2日目:予選

朝、前日から続く折衝で、予選審査欠席。

昼、折衝合意後、天安門、紫禁城(故宮博物院)を観光。

夜、北京市少年宮を訪問。

子どもたちの歓迎演奏に対して柴崎和圭・森陽介が重奏を披露。

その後、北京市少年宮・李先生による歓迎夕食会に参加。



▲(左から)虞錫安、張自強、松永勇次、張婦人、川口裕志、長国平の各氏



▲少年宮の子供たちによる歓迎演奏

▲柴崎和圭と森陽介の重奏



▲廊下や控え室で練習する重奏組グループ

変な重労働で、さぞかしお疲れだったろう…。時折私に中国語で話しかけてきた。

ということで、この日の私の審査は、【少年B組(13～15歳):32人(自由曲12分以内)／重奏青年組(16歳以上):19組(12分以内で二曲まで演奏可／予選なし)／室内楽:5組(電子楽器使用禁止／予選なし)の部】であった。終了は夕闇せまる18:30であった。

◆「芸術家組」決勝…1人20～30分の演奏

14日はコンクール最終日。会場を「北京金域万豪酒店」という豪華なホテルの宴会場に移し、いよいよ【芸術家組(年齢制限なし)】の決勝である。

このクラスは要項によると、フリーベースアコーディオンを使うことを推奨。課題曲は、中国曲:李遇秋作品(ソナタ第3番第一楽章)と復調曲(ポリフォニック):バッハの(十二平均律)プレリュードとフーガ中の任意一曲、そして自由曲(15分以内、2曲まで)。決勝に進出した18名、一人約20～30分前後の演奏を、張自強審査委員長をはじめ中国から4名、ロシアから4名、私を含めて計9名

で審査するのである。

この日、時間制限を超えて演奏する出場者に女性スタッフがストップをかける場面があった。演奏者が奮然と抗議し、会場が騒然となる中、審査員が演奏を続けるように指示して場を治めたのであるが、場の雰囲気は「比賽」、つまり日本で言うところのまさに「試合」であった。

◆出場者はすぐに自分で点数の確認

ところで、審査に関して2日間をこなし、やっと解った事であるが…、審査員には出場者、演奏曲、師事する先生などの情報は事前には知らされない。どの部門を担当するかは当日朝に初めて指示される。出場者にはもち



ろん、誰が審査員かは知らされない。とにかく、誰が出場するのか、何名出場するのか、どんな曲を演奏するのか、審査員は誰なのか、どんな審査をするのかなど、直前まで皆目わからない状況で望むのであるから、不安この上ない。また、この決勝には楽譜の用意がなかった。これは予選段階で用意されている

◀場外で練習に励む児童

第10回北京国際アコーディオン芸術祭(コンクール)レポート〈3〉

8/13

8:30、コンクール3日目:決勝〈会場は中央音楽学院〉
審査は同時進行。日本審査員は二手に分かれての審査。
◎児童A組40名／少年A組10名:川口担当
◎少年B組32名／重奏青年組19組／室内楽5組:松永担当
夜、中国アコーディオン協会主催による歓迎パーティーに参加。



▲張会長を囲み、日本と中国のアコーディオン協会メンバーが集う。

8/14

8:30、コンクール4日目:決勝〈芸術家組のみ万豪酒店大宴会場〉
◎児童B組27名／合奏4組:川口担当
◎芸術家組18名:松永担当
16:30、閉幕式／会場:万豪酒店大宴会場(ホール)
夜、上海移動のため、閉会式には不参加。柴崎和圭が帰国。



▲11日からの4日間、19:30よりロシアを代表するアコーディオン演奏者たち「バヤン」のコンサートが万豪酒店大宴会場で行われた。演奏者は、
1日目:シンシキン(右端)、
2日目:リップス(右から3人目)、
3日目:セミョーノフ(4人目)、
4日目:スクリヤロフ(左端)

8/15

昼、上海アコーディオン学校のエデュケーション現場を視察。
Baili(バイリー)楽器工場視察。

8/16

昼、上海市内観光。
夜、「リップス」コンサート招待される。
舞台上日本のアコーディオン協会代表として聴衆に紹介される。

8/17

夕方:成田着



▲上海アコーディオン学校での授業風景
右は校舎。外国語学校の土日がアコーディオンに開放される。



▲Baili (バイリー) 楽器工場正門と組み立て作業をする労働者



▲上海の若者ファッション

からということであろうか。ひとまとめに一組だけ用意されていたが、はじめて接する曲を捜しているうちに演奏が終ってしまったりで、ほとんど役にたたなかった。

審査は、2枚複写式の採点票に出場者番号と部門、審査員の署名をし、ひとりの採点が終わるとすぐに採点係が引き上げる。しかし、最初の5人までは採点票を手元に残し、点数調整が出来るようになっていて、この段階でそれぞれが採点基準をつくり、審査員どうしの意見調整をするのである。総体的にみて、厳格・公正を考慮すれば、こういったスタイルも必要であろうと考えられる。

なお、帰国後、開催要項を要約してもらった中には、審査規定をこのような記載があった。

【審査規定】:「コンクール期間に審査員及びスタッフ達が出場者の指導教師の名前を尋ねることを禁止する。運営委員会は審査員会の審査結果に干渉することを禁止とする。決勝時、公証所が現場で公証を行う。審査委員会の評価は最終結果とする。予選の点数は決勝と関係なしとする。審査員の採点終了時点で、採点表(2枚複写式)のうち1枚はすぐ出場者に渡し、出場者は自分で点数確認が出来る…」

【優勝の比率】:「各組の実際出場者数の50%を決勝に出場させる。その中で、第1位は3%、第2位は6%、第3位は9%、第4位は22%、優秀賞は10%とする。第1位～

3位の出場者にはトロフィー、賞状、賞金などを与える。第4位と優秀賞の出場者には賞状を与える…」

審査にあたり、私は自分なりの基準を次のようにつくった。「ポリフォニックの演奏における技術と表現力」「フォルテにおける音色感」「演奏でのリズム、バランス、個性」などを視点とした。しかし、私としては初めて聴く作品を、演奏面で評価することは非常に難しい仕事であった。出場者の個人名、演奏曲などの資料も必要と感じたし、事前の楽譜検討もしたかったという思いは残る。

◆新しい時代の到来を予感

2日間の審査を通して特に感じた点は、若い学生や子供たちの技術レベルの高さである。フリーベース(コンパート式)もかなり普及しており、バヤン方式をはじめとするボタン式の楽器が多く使用されていた。才能のきらめきや情熱を感じる多くの若者の演奏は、アコーディオンの未来を感じさせてとても幸せな時間であった。クラ



▲重奏青年組決勝に聞き入る聴衆

シックをはじめロシアの作品や、ピアソラは勿論、北欧、西欧のオリジナル曲、現代音楽作品も演奏されていて、中国の新しい時代の到来を予感させた。

一方、「ポリフォニック」においては何人かの演奏以外は全体に低調で、アコーディオンで弾く事の意味が伝わってこなかった。特にフーガにおけるテーマの提示と展開、各フレーズの意味を表現することを大切にしたい。また、フォルテッシモというか、所謂「大音量」の連続は非常に疲れるものだ。楽器の性能も関連するだろうが、同種の小さな楽器で美しい響きをつくっている出場者もいたので、性能の問題ばかりではないと思う。アコーディオンにおけるフォルテ(というよりここでは音楽に於

けるフォルテ)について考えさせられた。併せて、「芸術家組」でも感じたことだが、楽器の調律も気になった点だ。これらは是非改善を望みたい。これは前記の「美しいフォルテ」と関連があるかも知れない。

◆今や、中国はアコーディオン大国

これだけの若い人たちがアコーディオンを真剣に学ぶ状況は、現代中国の発展の一断面であり、アコーディオンの存在が人々に夢や希望を与えるものになっている証拠でもある。かつて「革命の武器」であったアコーディオンが、「芸術表現する楽器」「楽しみの楽器」として変貌しつつあることを強く感じさせた。

これは私自身の体験と深くつながっているのが…、この国の歴史に思いを馳せた。いい事ばかりではないと思うが、これからも芸術的追求と合わせて、広い視野で交流等を積み重ねていけば、自由で、のびのびとした世界がそこに広がり、中国のアコーディオンは、やがて世界にむかって大きく花開くであろう。

最後にこの素晴らしいコンクールの審査が出来たことを誇りに思うと同時に、もう一度、張自強先生はじめ、張国平さん、多くの中国アコーディオン協会幹部のみなさんに心からお礼を申し上げて、私の報告とする。



▲アンサンブル組・入賞記念演奏(閉幕式で)